

硬膜外麻酔を受ける方へ

硬膜外麻酔は、背中から針を刺して硬膜外腔という狭い空間に細いチューブ（カテーテル）を留置し、そこから痛み止めを投与する鎮痛法です。主に無痛分娩や帝王切開での麻酔（術後鎮痛）として使用します。当院では事前にこの説明・同意書に基づき医師が説明し、その後理解・了承された方へ硬膜外麻酔を行います。なお、緊急時は硬膜外麻酔を原則お受けしません。

・利点；

多くの場合で十分な鎮痛が得られるため、陣痛や術後の疼痛が大幅に緩和されます。ごくわずかに赤ちゃんへ薬が移行することがありますが、赤ちゃんへの直接的な影響はほとんどありません。

・懸念；

お腹に力が入りずらくなるため、分娩時の息みが効果的でないことがあります。その際は吸引分娩や鉗子分娩を行います。

*稀に起こる重大な合併症；

・アレルギー：麻酔薬に対してアレルギーがある場合、痒みや発疹が出現したり、場合によってはアナフィラキシーショックという重篤なアレルギー反応が起こることがあります。

・局所麻酔中毒：麻酔薬が血管内に入り込む（カテーテル留置後、持続的に血液が吸引できる時に強く疑う）ことで味覚異常や興奮症状が起こり、重篤になると痙攣や意識障害や不整脈などを起こすことがあります。

・脊髄くも膜下麻酔：針が意図せずくも膜下腔まで達する（カテーテル留置後、液体が吸引できる時や液体に糖が検出される時）と麻酔の効果が強くなり、下肢が動かなくなったり、血圧低下や呼吸障害などを起こすことがあります。

・硬膜外血腫：直接目に見えない場所に針を進めていくため、手技の最中に血管を損傷することがあり、そこに血が溜まると血腫を形成します。足のしびれなどを引き起こしますが、多くの場合は一時的なもので改善していきます。一方、手術による血腫除去などを必要とすることもあります。

・感染：清潔操作には万全を期して行いますが、細菌が入り込んだ場合は脊髄周囲に感染を起こすことがあります。

その他、上記以外にも意図せず合併症が起こることがあります。また体格や体位によって硬膜外麻酔が難しいと判断される場合もあります。その際は硬膜外麻酔の代わりに別の鎮痛剤を用いることをご提案します。

これらの合併症を予防するために事前に各種の検査を行い、当日は専用の器具を用いて確立した手順で硬膜外麻酔を行います。上記の合併症を疑う時は再挿入や処置の中止を、万が一の合併症の際には適宜必要な処置を取らせていただきます。

説明・同意書

上記の内容につき説明しました。

年 月 日

説明医師：

印

にしじまクリニック 院長 殿

私たちは上記について理解しました。

そのうえで処置を受けることに同意します。

また必要と判断された追加処置や変更および中止にも同意します。

令和__年__月__日

妊婦患者本人 署名_____

配偶者 署名_____ 緊急連絡先 _____ - _____ - _____

親族（続柄：__） 署名_____ 緊急連絡先 _____ - _____ - _____

* 処置を受ける本人と配偶者が同じ戸籍にいない場合、本人の親族による署名が必要です。